

老人は、また酔払いが寝てやがると怒った顔になった。

ミッドチルダの首都クラナガン、第十五区の繁華街から少し離れたところに建っている雑居ビルの路地裏だ。

場所が場所だけに、こうやって朝に来てみれば、酔払いなり浮浪者なりが寝ていることもしばしばあるのである。

吐瀉物を撒き散らしていないだけかもしれませんか。このビルの管理人でもある彼は朝の日課となつている掃除を中断して、その男に近付いた。二、三発蹴りを入れて起こしても文句は言われまい。

三月で春めいた気候になつてきたとはいえ、まだ夜になると寒い。しかし、その男はあまり服を着込んでいない。隣には魔導デバイスが落ちていた。

相当飲んだのだろうか。男の体の周りに黒い沁みのようなものが広がっている。まさか、失禁したのだろうか。彼は不快感をも示した。

そこで老人はようやく違和感に気が付いた。こいつは寝ていない。目を開けている。だ

が、その目はどこにも焦点が合っていないし、何より瞳孔が完全に開き切っていた。どうやら呼吸もしていないようだった。

そして、アスファルトの地面に広がっている黒い沁みは血であることにも気が付いた。管理人は周囲を見廻した。実はこれは精巧な人形が置かれているだけではないだろうか。MBSかテレビ・クラナガンのジョーク番組か何かだろうか。どこかでテレビカメラが廻っていて、動揺する様子を面白おかしく撮っているだけではないか。

そろそろレポーターがネタばらしに来てもいいだろうと言わんばかりの顔になる。

「おい、大丈夫か」

彼は箒でその男を恐る恐る突いたが何の反応も返ってこない。勇気を出して触れてみると、それは恐ろしく冷たかった。彼は納得したかのように独り頷いて警備室へと急いだ。警備室のドアを開けると、ちょうど出勤してきたばかりの警備主任が居たので、上擦った声で告げた。

「ジョージさん、管理局に通報してくれ。路地裏で人が死んでいる」

「はい、こちらのケーキ三つですね。合計で二一六〇クレジットです」

フェイトはカードを差し出すと、彼女の馴染みの女性店員は慣れた手つきで決済を終らせた。

「いつもありがとうございます。娘さんにもよろしくね。そうだ、おまけに付けておきましょう」

「いいんですか？」

「気にしないでください」

（贅沢したつもりだけど、おまけされたんだから結構お得だね）

フェイトは店員がケーキを詰めている間、店内を見廻した。ショーウィンドウに残っているケーキは極僅かだった。もつたいないがこれはもう処分されてしまうものだ。

柔らかな室内燈が照らす店内には、客はフェイトしか居なかった。時計の短針は間もなく七時を差そうとしている。

「ありがとうございます！」

店を出ると、三月のいくらか冷たい風がフェイトの長い金髪を揺らした。曇天であり、雲が街の明かりを受けて橙色に奇妙に塗りつぶされている。

フェイト・テスタロッサ・ハラオウンは、時空管理局の本局次元航行部所属の執務官だ。長期の出張も多く、本局で従事する期間でも、帰宅の時間帯は遅い部類に入る。

彼女がよくケーキを買う店は、いつもは午後七時に閉まる。お気に入りの店だが、こう

やって帰宅する際に寄って買えるのは結構珍しいことだ。

最寄りのステーションのロータリーが帰宅する人々で一番溢れ返る時間であった。フェイトは、その人ごみをかきわけて、人気の少ないところまで行った。

「そうだ、なのはに連絡しないと」

自宅にコールを掛けると、数回の呼び出し音で高町なのはの姿が出た。

『はい、どうしたの？』

「ああ、なのは、今日はもうすぐ家に着くよ」

『え、どうしたの？ 何かあったの？』

なのはが心底信じられない顔をする。それはまるで大事件が起きたと言わんばかりの口調であった。ここまで驚かれるとは。フェイトは複雑な顔をなのはに見せた。

「今日は仕事が早く終わっただけだよ。それに——」

『あ、駅前のケーキ？』

ホログラムディスプレイを通じてケーキセットの箱を見せると、なのはの顔が破顔する。この店のはなのも、娘のヴィヴィオもお気に入りであった。

「他に何か買っておこうか？」

『大丈夫かな』

「わかった。それじゃあ——鍵は開けておいてね」

『うん、わかった』

ディスプレイが霧散する。歩き始めるフェイトは見るからに上機嫌そうだ。週末で明日から土日は休み。普段は仕事で忙しい彼女がゆつくりと休める週末が来ているのだった。

街頭のニューススクリーンを見ると、ニュースのヘッドラインが流れている。政治汚職、議会の混乱、路地裏での殺人事件、工場街での爆発事件……。

事件は絶えることはない。だが、フェイトとしては抱えていた事件を処理し終えたので、解放感に溢れていた。もつとも二日間の休みが終れば、また事件と向き合う日々であるが、この解放感に勝るものはそうそうなかった。

ようやく信号が青になって、一斉に人々が渡り始めた。その瞬間、フェイトは眩暈の様なものを感じて、足がもつれそうになった。

程なくして雑踏はどよめきに包まれた。木々が、建物の窓ガラスが、揺れている。

「地震か……」

それほど大きなものではなく、揺れはすぐに収まった。

フェイトは反射的に街頭スクリーンを見ると、「ただいま克蘭ガン地方で地震がありました」と速報が出ていた。

横断歩道を渡り切った後もしばしそれを眺めていたが、特に続報は入って来ない。どうやら小規模な地震であったらしい。

人々もすぐに興味を失って、ロータリーはいつもの落ち着きを取り戻し始めた。フェイトは手に持ったケーキセットに目をやって足早に歩き始めた。

フェイトは我が家の一階リビングと二階の寝室から明りが漏れているのを見て、安堵の表情を浮かべた。我が家を見ると自然と緊張も緩むものであった。

「さっきの揺れは大丈夫だったのかな」

立っただけでも気が付くほどの揺れだ。なのはと娘のヴィヴォオとの顔を思い浮かべた。怪我をしていないだろうか。大丈夫だろうか。

ドアノブに手を掛けて、フェイトは首を傾げた。鍵が閉まっているようだ。おかしいな、開けておいてと連絡したはずなのに。不審に思いながらもフェイトは鍵を開けた。

「ただいま」

その声につられたかのように、エプロンを着けたなのはが顔をリビングから覗かせた。フェイトは、なのはの顔を見てもう一度帰宅の挨拶を言った。

「ただいま、なのは」

「あれっ？ あれ、あれ、フェイトちゃん？……」

「どうしたの、なのは？」

なのはは怪訝な表情をフェイトに見せた。まるで彼女の帰宅がおかしいと言わんばかり

だ。

「いや、その、まだ着替えていなかったの？」

「うん？」

今帰ってきたばかりだ。なのはのおかしな言動にフェイトも首を傾げる。

二人揃って首を傾げていると、階上より誰かが降りてくる音が耳朶を打った。反射的にそちらのほうに顔を向ける。

降りてきた人物を見て、フェイトは石化したかのように動こうとせず、思わず買ってきたケーキの箱を落としそうになった。

啞然として息をゆっくり吞んで、フェイトは壊れた機械を想像させる所作で、なのはに視線を移したのであった。

（ああ、これは夢かな？）

そうだ、夢であってほしい。今この場に居合わせている全員がそう思っているだろう。悪夢が目が覚めたら、いつもの日常なのだろうか。

「何なの、これ！」

なのはの素っ頓狂な声が高町家に響き渡った。なのはの叫び声で、フェイトはようやく金縛りが解けて、階段上に居る人物を思わず睨めつけると、彼女も突き刺すような視線を向けてきた。

沈黙が隙間なく満たされて、言いようのない雰囲気支配された中、奇妙な睨みあいはずっと続いたように思えた。

「どうしたの？」

この騒ぎを聞きつけたのか、様子がおかしいことに不審に思ったのか、居間からヴィヴィオが顔を出してくる。ヴィヴィオも流石に刮目して呻くように言った。

「フェイトママが二人？……」

「バ、バルディッシュュ！」

フェイトは無意識のうちにバルディッシュュを手取る。階段に居るのは偽者に違いないと。だが、相手も同じことを思ったのだろう。同じようにバルディッシュュを取り出して

「あれ？」

それでフェイトも動きをはたと止めて、相手もそれに倣う。フェイトは自分の手に握っているバルディッシュュを見て、そして相手を持っているバルディッシュュに視線を遣った。

「どうして、私が二人居るの？」

フェイトの間抜けな声が、玄関に漂った。



春にしては真冬を思わせる寒い朝である。

フェイトは寒さのせいで目を覚まして隣を見たが誰も居なかった。フェイトは上体を起こして周りを見廻して溜息を吐いた。部屋には、クリスマスに似た可愛らしいぬいぐるみが置かれている。娘のヴィヴィオの寝室だった。

「ああ、夢じゃないのか」

フェイトはここがヴィヴィオの部屋であることに絶望が入り混じった溜息を吐いた。

あの後、高町家は蜂の巣を突いたような騒ぎになったのは言うまでもない。

着替えて顔を洗ってリビングに行ってみれば、先に帰っていたフェイトが既に居た。

「おはよう」

「……おはよう」

朝からぎこちない挨拶。なのはは台所で朝食を作っている。ヴィヴィオは居なかった。日課のランニングだろう。

帰宅後、最初は事態に戸惑っていたフェイトであったが、すぐに自分が本物だと互いに主張を始めた。危く家の中で戦闘になりかけたが、なのはがどうにか止めに入って収拾をつけたのである。

その後、なのはのレイジングハートにより二人の魔力波長の計測が行われた。驚くこと

に二人の魔力波長が完璧なまでに一致していたのであった。魔力波長は個人識別にも使われるほどの唯一性を持っており、教科書通りに考えれば一致することはまずないのである。その後、二人のフェイト同士により、ありとあらゆる試験があった。なのはの秘密をどこまで知っているか。今日はどういった手順で仕事を片付けたか。重箱の隅を突くような確認は一時間に及んだ末、記憶に齟齬はないことが確認され、二人はその試験をひとまず中断したのだ。

だが、寝る段になってまたひと騒動あったのだ。なのはとフェイトのベッドで、流石に三人寝ることは難しかった。どちらか一人がヴィヴィオの部屋で寝ることになり、このフェイト——遅れて帰ってきたほう——はじゃんけんで負けてしまった。

彼女は娘の寝室で一夜を明かすことになったのである。フェイトとしては、娘と一緒に寝られたのはいいことだけど、やはり釈然としない様子であった。

フェイトは席に着いて、「偽者」に一瞬だけ鋭い視線で射抜いた。相手もそれに応じてくる。

(いい天気なのに気分が悪いな。新聞を読むか……)

今日の一面は「外交記録局から情報流出か？」という記事で飾られている。二つの白く透き通った手が同時に端末に伸びた。

「新聞を読みたいんだけど」

「私もなんだけど」

「はい、朝ごはんできたよ」

朝から剣呑とした雰囲気をなのはの甘い声が振り払う。同時に、空腹を唆る匂いが食卓にほのかに漂う。

「ありがとう」

「うん、ありがとう」

（お腹がいっぱいになれば少しは落ち着くかな）

程なくしてヴィヴィオも帰ってきて、四人の朝食が始まった。しかし、会話は全く弾むことはない、ただただ黙々と食事を口に運ぶだけで、車に燃料を補給するような殺伐とした食事だった。

朝食も終りの頃になって、なのはが重い口を開いた。

「あのう、フェイトちゃん」

二人が同時になのはに注意を向けると、なのはは困惑めいた表情を浮かべた。

「うーん、明後日からまた月曜日だけど、お仕事はどうするの？」

「仕事か……」

もう一人のフェイトが呻くように言って、二人のフェイトは沈黙を守る。避けて通れない問題であった。

休むわけにもいかない。そうかと言って、二人同時に出勤するわけにもいかない。

「うん、そうだね……………、まずいよね。月曜日からは——」

「私が出勤する——」

案の定、声が同時に被さると、また半ば憎悪を込めた視線で牽制を始める。

「偽者が出勤したら駄目だよね」

「いや、出勤しないのはそっちでしょう？」

「二人とも止めて」

「…………ごめんなさい」

なのは大きな溜息を吐いて頭を抱えた。すぐに些細なことで喧嘩になるので困ったものだと言わんばかりの顔だ。

「ねえ、なのはママ、フェイトママ。これはどうかかな……………」

今まで黙っていたヴィヴィオがおおず口を開いた。

「いい案があるの？」

「二人で、交互に出勤するのって駄目かな」

その提案に二人のフェイト同士は思わず視線を合わせた。